

2010年台北・新北市長選挙の考察

小笠原 欣幸

2010年11月27日、台湾の五大都市で市長選挙の投開票が行なわれた。民進党は五都全体で上昇気運にあったが、北の二都では国民党が底力を見せた。市長選挙は、中央の二大陣営の対立構造と地方の支持構造の特徴とが反映される。台湾政治を理解する上で興味深い選挙戦であった。本稿は、候補者の選挙戦略に注目し、北二都市長選挙のプロセスと投票結果を考察する。

< 目 次 >



- (1) 台北市の候補者
- (2) 新北市の候補者
- (3) 台北市の選挙戦
- (4) 新北市の選挙戦
- (5) 北二都の終盤戦
- (6) 台北市の投票結果
- (7) 新北市の投票結果
- (8) 次の選挙の始まり



(1) 台北市の候補者

台北市は首都として情報の発信力があり、一地方でありながら注目の度合いと影響力は非常に大きい。民選後の総統(李登輝, 陳水扁, 馬英九)は、すべて台北市長経験者である。しかし、その社会構造は台湾全体から見ると特殊である。平均的な台湾の県市と比較すると、台北市は、①外省人および外省人第二世代・第三世代の比率が高い、②公務員・軍・教育関係者の比率が高い、③一人当たりの平均所得が高い、という特徴がある。台北市の政治動向は重要ではあるが、必ずしも台湾全体の先行指標になるわけではない。《表 1》は、台北・高雄市長選挙と総統選挙の当選者を党籍で色分けしたものである。台北市長選挙と総統選挙との関連を見ると、過去4回で当選者の党籍が一致したのは1回だけである。逆に高雄市は3回一致している。

《表 1》 台北・高雄市長選挙と総統選挙の当選者

	1994/96年	1998/00年	2002/04年	2006/08年	2010/12年
台北市長選挙	陳水扁	馬英九	馬英九	郝龍斌	郝龍斌
高雄市長選挙	吳敦義	謝長廷	謝長廷	陳菊	陳菊
総統選挙	李登輝	陳水扁	陳水扁	馬英九	〇〇〇

※青色が国民党籍、緑色が民進党籍を示す。

台北市長選挙の基本構図は、馬英九以来続く国民党の市政を市民がどう判断するか、そして、基礎票で劣る民進党候補がどのような選挙戦を展開するのかであった。郝龍斌(58歳)は、1952年8月22日台北市に生まれた外省人第二世代である。父親郝柏村は軍の代表的人物で、参謀総長、行政院長を歴任した。台北市で育った郝龍斌は、閩南語で演説することはできない。郝は、李登輝時代に国民党を離党して「新党」を結成し、同党公認候補として立法委員に当選した。陳水扁政権期には環保署署長(環境庁長官に相当)に就任した(2001年3月～2003年10月)。陳

水扁の「全民政府」の呼びかけに応え入閣したのだが、このことが後に泛藍陣営内部の政敵から繰り返し攻撃される材料になる。2006年、郝は国民党に再加入し、馬英九台北市長の後継候補を決める党内予備選挙で、丁守中、葉金川らと争い公認を勝ち取った。だが、馬英九の意中の人物は郝ではなかったと見られている。郝は同年12月の台北市長選挙で、民進黨の謝長廷、無党籍の宋楚瑜らを破って当選した。

郝の市長としての実績としては、都市交通網の整備拡大(捷運文湖線・蘆洲線の開通)、市内道路の補修、台北松山空港の活性化、内湖・南港地区開発、下水道整備、淡水河整備、市政に関するあらゆる要望・苦情を受けつける専用電話の設置、デフリンピック開催(2009年9月)などが挙げられる。しかし、市民の評価は厳しいものであった。『中國時報』の2009年1月の調査によると、郝市長の満足度は全25県市の首長の中で22番目の評価であった。『天下雜誌』の2010年8月の調査では21番目の評価であった(「二〇一〇年廿五縣市城市大調査」『天下雜誌』455期, 2010年9月)。他のメディアの調査でも、郝市長への評価はおしなべて低かった。

郝市長の満足度が低い理由としては、猫空ロープウエーや捷運文湖線の運行トラブル、道路補修工事がもたらす交通不便など市政執行上の問題に加え、側近重視の市政運営、指導力不足、市民との交流不足など市長としての資質が疑問視されたことが影響したと考えられる。しかし、市政満足度は低くとも選挙になれば郝の再選は間違いないというのが一般的判断であった。台北市は国民党の基礎票が固い地区で、国民党が分裂しない限り同党候補の当選は確実である。郝の市政運営に対しては国民党支持者にも失望感があり、党内の一部から問題視する声が上がっていたが、大きな動きにはならなかった。郝は比較的楽に再選の選挙に臨むことができた。郝陣営は先を見据えて、馬英九や党中央には頼らず自前の選挙戦を展開するつもりでいた。

台北市で国民党は固い基礎票を有している。市内の立法委員選挙区8つは、すべて国民党の議席である。市議会は、全52議席のうち国民党24、新党4、親民党2、民進黨18、台聯2、無党籍2で、泛藍陣営が多数を占める。《表2》は、台北市における過去3回の市長選挙と総統選挙の投票結果を泛藍陣営と泛緑陣営の得票率にまとめたものである。1998年市長選挙の馬英九と王建煊、2000年総統選挙の連戦、宋楚瑜、李敖、2006年市長選挙の郝龍斌、宋楚瑜、李敖をそれ

《表2》台北市における藍緑陣営の得票率

	泛藍陣営	泛緑陣営
1998年市長選挙	54.10%	45.91%
2000年総統選挙	61.81%	37.64%
2002年市長選挙	64.11%	35.89%
2004年総統選挙	56.53%	43.47%
2006年市長選挙	58.56%	40.89%
2008年総統選挙	63.03%	36.97%

※藍緑を判別できない無党籍候補の得票は除外。

ぞれ合算し泛藍陣営とした。泛緑陣営は民進黨のみである。2002年市長選挙、2004年総統選挙、2008年総統選挙は二党の公認候補による1対1の争いであった。民進黨の得票率の最高値は、陳水扁が再選を目指して失敗した1998年市長選挙時の45.9%である。一方、最低値は、馬英九の市長再選に挑戦した李應元の35.9%である。3回の総統選挙の数値もこの枠の中に入っている。台北市の泛藍陣営の支持構造は安定していて、民進黨候補が1対1の選挙で勝ち越すことは非常に難しいことがわかる。前回市長選挙で謝長廷の得票率が40.9%であったことに「意外によかった」という反応が出たのはこのような背景があるからである。

民進黨内で台北市長選挙に名乗りを上げたのは蘇貞昌(63歳)であった。蘇は、1947年7月28日屏東県に生まれた本省人である。父親蘇啓東は屏東県政府に勤める公務員、母親江清蓮は小学校の教師をしていた。蘇貞昌は、美麗島事件の弁護を引き受けたことから党外運動に参加し、台湾省議員を経て、台湾の南端の屏東県と北端にあたる台北県の二つの県長を務めた。

陳水扁政権期には、民進党主席(2005年1月～同年12月)、行政院長(2006年1月～2007年5月)を歴任した。2008年総統選挙で陳水扁の後継候補を目指したが、党内予備選挙で謝長廷に敗れた。2008年以降は、蔡英文の党運営に協力しながら影響力を養ってきた。

2012年総統選挙を目標にしていた蘇は、2009年12月の台北県長選挙に出馬し、それを足掛りに総統選挙に駒を進める計算であった。行政院長を務めた人物が県長に復帰するのは異例であるが、民進党を再建していくためにもよいと考えたのであろう。民意調査では蘇が現職の周錫璋県長を圧倒していたので、蘇が台北県長に当選する可能性は高かった。しかし、馬英九政権が地方制度改革を行ない、台北県は新北市という名称の直轄市に昇格し、首長選挙は1年先送りとなった。

この昇格がなければ、蘇が台北県長に当選した場合、2009年12月の就任から2012年3月の総統選挙まで2年以上の時間があつた。仮に総統に当選し県長を辞任することになっても、残り任期が2年を切っているので内政部が代理県長を派遣すればよい。ところが、新北市の市長は2010年12月の就任なので、総統に当選したら1年半で市長を辞任しなければならないし、しかも、市長の補欠選挙が必要になる。市長選挙で市の発展を語っておきながら当選したらすぐに総統選挙の活動ということでは市民の理解を得るのは容易ではない。かといって、勝てそうな選挙で落選したのでは総統選挙の出馬もままならなくなる。

蘇貞昌は新北市長選挙に出れば、勝っても負けても総統選出馬が難しくなるというジレンマにとられることになった。民進党内では、蘇が新北市長選に出馬し五都のうち三都を確実に取ることへの期待が高まっていたので、黙っていればそこに追い込まれる状況にあつた。一方、台北市長選に出馬した場合は、惨敗すれば政治生命が絶たれるが、善戦すれば当選できなかったとしてもかつての陳水扁と同じように総統選挙に出馬する道が開ける。当選した場合は民進党にとっての救世主となるので、総統選出馬コールが起きればそれに呼応してもよいし、行政権限の大きい台北市長を4年やるのも悪くないと計算することができた。つまり、台北市長選に出れば、リスクはあるが勝っても負けても政治的可能性が開けてくるのである。相手は不人気の郝龍斌であるから、蘇陣営にとってはチャレンジしたくなる賭けであつた。

しかし、蘇が台北市に出たため民進党が新北市で有力候補を擁立できなくなり、台北市も新北市も両方敗北する可能性があつた。その場合は選挙後蘇への逆風となる。新北市には勝てそうな候補、つまり蔡英文を押し込むことがこの賭けの必要条件であつた。蘇の潜在的ライバルとなる蔡英文は、当初党内で初心者扱いされていたが、2009年9月の雲林県立法委員補選で勝利したところから主席として求心力を高め、県市長選挙とその後の立法委員補選での躍進を経て、2012年総統候補の本命という見方が台頭してきた。蔡が台北市長選への出馬を検討しているという観測もあつた。蔡は、自身の出馬については態度を明らかにしていなかったが、党主席として五都選挙の戦いを主導するつもりでいた。

蘇は、2010年3月3日、蔡の機先を制する形で台北市長選挙の出馬宣言をした。蘇は、台北市では国民党市政が12年続き市政が停滞しているとして、生活を大事にしたいという人民の期待に応え、市民に選択肢を提供するため、台北市長選挙に出馬すると表明した。新北市に出ない理由としては、同一の県市で3期以上首長をやるべきではないと考えるからと説明した。この出馬宣言に刺激され、民進党はいきなり「オレがオレが」の出馬宣言ラッシュとなった。台北市は、蘇の他に、陳師孟(元総統府秘書長)、周柏雅(台北市議員)が出馬表明をした。新北市は、游錫堃(元行政院長)、陳景峻(元立法委員)、尤清(元台北県長)、周慧瑛(元立法委員)らが出馬を表明した。蔡主席が抑えていた党内ポジション争いの蓋が開いてしまったのである。

蘇陣営は蔡英文を新北市に押し込むことができると判断し見切り発車で出馬に動いたのだが、それは蔡との関係悪化というリスクを内包していた。蘇本人および蘇の幕僚グループは、先行しながら巧妙な謝長廷に出し抜かれた 2008 年の予備選挙がトラウマになっていたと思われる。この敗北の経験を教訓として、彼らは待ちの姿勢ではなくリスクを冒して攻める姿勢に転じたのであろう。だがそれは、蔡英文にとっては行動を指図されることに他ならなかった。蔡は、自分が主導権を握っているように見えても隙を見れば瞬時に党内の権力ゲームが動き出す、という駆け引きの怖さを思い知らされることになった。

(2) 新北市の候補者

国民党は台北県(現新北市)で苦境に陥っていた。現職の周錫瑋県長の評価は低空飛行を続けていた。周錫瑋(52歳)は、1958年3月11日彰化県に生まれた。父親周書府は大陸から渡ってきた職業軍人で、後に立法委員を務めた。周錫瑋は外省人第二世代であるが、閩南語の演説はかなり流暢である。周は1994年に台湾省議員に当選し政治家としてのキャリアを開始する。1998年には台北県第一選挙区から立法委員選挙に出馬し当選。2000年総統選挙では宋楚瑜を支援しその後親民党の結党に加わり、2001年と2004年の立法委員選挙は親民党候補として当選した。しかし、2005年台北県長選挙に出馬するため国民党に戻り、予備選挙で国民党の公認を勝ち取り、12月の本選挙で民進党の羅文嘉を破って県長に当選した。

台北市に隣接する都市部と旧来の農漁村とが併存する台北県の統治はただでさえ難しい。周県長に対しては、様々な観点からの批判があった。県政府の人事で親民党関係者が多く配置されたことへの疑問があったし、一部県政府幹部のスキャンダルもあった。県政の執行で地元とのコミュニケーションを欠いた事例もあった。立法委員時代の癖が抜けずにパフォーマンスに走り、中央政府を声高に攻撃したり県政府内の部局を批判したりするという指摘もあった。当選後は支持者へのあいさつをしなかったとか、県内の郷鎮市の首長をないがしろにしたという陰口もあった。メディアとの関係がうまく築けなかったことも指摘されている。周の言動は、メディアでたびたび誇張して伝えられた。例えば、台北県の山に虎が出たという通報を真に受け視察に出かけたことが「県長の虎狩り」としておもしろおかしく繰り返し報じられた。

いくつもの要因が重なった結果、あらゆるメディアの民意調査で周錫瑋県長の満足度は低迷し、台湾の県市長の満足度ランキングでいつも台東県の県長と最下位を争う状況になった。周は再選への強い意欲を示していたが、民意調査では民進党が誰を出馬させても周を上回り、特に周錫瑋対蘇貞昌の支持率調査では、周はダブルスコアで蘇にリードされていた。政権与党高層は周を1期だけで降ろそうと試みたが、周はそれをはねのけ再選の意思表示を一層強くした。台北県は台湾最大の人口を擁する自治体であり、ここで県政を失えば馬英九政権への打撃となる。政権与党高層は、2009年12月の県市長選挙で蘇が台北県長選挙に出馬すれば、群れの先頭に立つ羊が他の羊を引っ張るように他県市の民進党候補を牽引し、その結果国民党が敗北することを恐れた。危機感を抱いた政権与党は、五都昇格という制度変更の煙幕の中で選挙を1年先送りにした(五都選挙が行なわれることになった経緯については拙稿「五都市長選挙の概況」<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ogasawara/analysis/fivecitieselection2010a.pdf>を参照)。

こうして時間を稼いだものの、周県長の支持率低迷は変わらなかった。政権与党高層と周との水面下の攻防は2009年末まで続いたが、周側も簡単には降伏せず、国民党県議が周の再選出馬を求める署名活動を始めるなど反撃も見せた。政権与党高層の危機感は2009年12月の県市長選挙の不振でいよいよ強まり、ついに周降ろしを決断した。仕掛けの手段は、国民党系

の新聞に、内部の民意調査の数字を漏らしたり、周は入閣するらしいとか、新北市長選挙には〇〇〇が出馬するらしいとかの情報を流したりすることであった。〇〇〇は、朱立倫であったり県選出の立法委員であったりした。これを何度もやられると民意調査の数字は上がりようがなく、ボディブローのように効いてくる。周は徐々に追い込まれていった。旺旺中時が2010年2月3日-4日に行なった民意調査では、蘇の支持率51%に対し周は22%であった(「逐鹿新北市本報新民調蘇貞昌獨霸 略勝朱立倫」『中國時報』2010.2.7)。最後は、政権与党高層が朱立倫の擁立を決めたことが決定打となった。県議の多数は周についていたが、周にはもはや挽回の手は残っていなかった。2010年2月22日、周錫璋はついに不出馬を発表した。周は「各種の手段によってリンチされるくらいなら、きっぱり不出馬した方がよい」と語ったとされる(「周錫璋挺朱立倫 不選新北市」『聯合報』2010.2.22)。

朱立倫は当初新北市長選挙出馬に乗り気ではなかったが、しだいに外堀を埋められた。2009年9月の内閣改造で、朱立倫は桃園県長から行政院副院長に転じていた。このポストは行政院長にも副総統候補にも道が開けるので、この布石は馬英九が朱立倫を後継候補と考えている証と見られた。他方、新北市長のポストは馬英九後継の地位を固める上で逆に有利だという見方があるが、一旦新北市長に当選すれば1期だけで退任するのは不自然であるし、民進党に県政を奪われるという理屈もあり、2014年に再選をかけて市長選挙を戦わなければならない可能性が高い。再選されれば、任期途中で2016年総統選挙に出馬するのは難しくなる。こうした事情があるので、本来なら馬英九は、人事のカードとして朱立倫を行政院副院長ポストに置いておきたかった。しかし、新北市で出馬できる人材としては朱が党内の最強の候補であった。馬英九としても、自分の再選に黄色信号が灯り背に腹は換えられなくなったので、有力なカードを一枚手放し、朱を新北市に投入することに決めた。朱としても、馬が再選に失敗しては元も子もなくなる。結局、馬と朱は運命共同体ということになった(「新聞幕後／馬朱合體勸進 民調決勝勸退」『聯合報』2010.2.13)。

周錫璋が再選不出馬を表明した直後、朱立倫対蘇貞昌、朱立倫対蔡英文を想定した民意調査が行なわれている。民進党の候補が蘇であるなら、朱の支持率38%に対し蘇の支持率は44%であった。しかし、民進党の候補が蔡であるなら、朱の支持率48%に対し蔡は30%で、朱がリードした(「新北市民調／蘇貞昌44% 朱立倫38%」『聯合報』2010.2.24)。つまり、民意調査では、蘇貞昌>朱立倫>蔡英文という強弱関係が成立していた。朱にとっては、相手が蘇ならば非常に厳しい戦いになるが、蔡ならば十分戦える状況であった。

先手の蘇貞昌が台北市を「取った」ことで、後手の蔡英文は非常にやりにくい局面になった。党内では蔡が新北市に參選することを期待する声が高まってきたが、蔡は決断しなければならぬ選挙が三つもあった。一つ目は党主席選挙、二つ目は五都選挙、三つ目が総統選挙である。総統選挙はまだ先であるが、党主席選挙と五都選挙をどうさばくかでその後の可能性は大きく変化する。2年の任期切れを控えた党主席選挙は5月に迫っていた。党内の一部長老からは党主席のポストを四天王の誰かに明け渡すよう求める声もあった。蔡は五都選挙に向けて党内の意見調整を進め、公認候補は話し合いを原則とし、それができない場合は党員投票ではなく民意調査で決めること、5月を期日とすることという大枠をはめ、党内対立を押さえ込む努力をしてきた。その最中に蘇に機先を制されたので、蔡としては相当の不快感があった。蔡にとって新北市長選挙は、蘇と同じく当選すれば総統選挙へ出にくくなるし、出たからといって勝てるとは限らないので蘇より大きなリスクを負わされることになる。このような蘇に設定された枠組みに従いたくはなかった。蔡は、3月24日、党主席の再選を目指すこと、現段階では党主席と候補者の身分を

兼ねることはできないと考えるから五都選挙には出馬しないこと、を表明した(「蘇嘉全:蔡英文意在黨主席 不選5都」[中央社]2010.3.24)。

蔡の不出馬表明により、民進党は五都の候補を決めることができなくなった。民進党は、党内に9人の委員から成る公認候補指名委員会を設置し、そこに指名の権限を委ねた。メンバーは党内の各派各勢力を網羅していた。蔡は主席であるが指名委員会のメンバーではなかった。委員会は内々に蔡に出馬を求めることで一致していたが、軽々に動けば蔡に拒否される可能性もあったので慎重になっていた。蔡が出ない場合の新北市の公認候補は游錫堃になる予定であったが、それでは当選の可能性は低く、民進党の士気が上がらないことが予見できた。膠着状態のままタイムリミットの5月が近づき、党内にあせりの色が見えてきた。台北市長選出馬宣言をした蘇に再考を求める声、蘇の独断を批判する声も上がった。蔡は不出馬の態度を維持したままぎりぎりまで成り行きを見守り、最後は党主席の再選を経て党内から熱い蔡コールが上がる中で出馬を宣言した。党内は安堵と喜びの声に包まれた。蔡は結果として蘇の枠組みに応じたが、プロセスではそれなりの政治手腕を示した。市長に当選した場合の対応について、蔡は「最後まで責任を負う」という言い方をした。これは蘇貞昌の「当選したら任期いっぱい務める」という公約、朱立倫の「当選したら決して別の場所に行かない」という公約と比べると、将来の転進の余地を残した発言と解釈された。

朱立倫(49歳)は、1961年6月7日桃園県に生まれた。父親朱樟興は大陸から渡ってきた職業軍人で、退役してから桃園県議員、国民大会代表を務めた。朱立倫は子供の時に、桃園県大溪の母親の実家と同県八徳の眷村の両方の生活を経験した。母親の実家は祖母を中心とした本省人の大家庭で、朱は自然に閩南語ネイティブとなった。朱は、通常のカテゴリでは外省人第二世代となるが、「(本省人の)祖母に対し孫(朱立倫のこと)が外省人だと言って、祖母がどうしてそれを受け入れることができようか」という言い方でそうした族群のカテゴリに異議を唱えている(「本土的眷村孩子 朱立倫從小很雞婆」TVBS NEWS 2010.10.18 http://www.tvbs.com.tw/news/news_list.asp?no=yehmin20101018151615)。朱の妻の実家は台南の政治家族で、岳父高育仁は台南県長および台湾省議会議長を務めた。朱は、台湾大学工商管理系を卒業後、ニューヨーク大学で金融、会計学を専攻し、修士号、博士号を取得、帰国後台湾大学で副教授に就任した。37歳で桃園県選挙区の立法委員に当選、40歳で桃園県長に当選し、順調な政治経歴を歩んできた。

蔡英文(54歳)は、1956年8月31日屏東県に生まれた。父親蔡潔生は客家系本省人で、当初屏東県で自動車修理工場を営んでいたが、後に台北に出て不動産投資で成功し、大資産家となった。蔡英文は、幼少の時から非常に裕福な環境の中で育った。現在リージェントホテルが建つ地点にあった蔡家の家の庭ではバスケットボールができたという(「談判專家變『非典女黨魁』 解構蔡英文」TVBS NEWS 2010.10.19 http://www.tvbs.com.tw/news/news_list.asp?no=blue20101019145212)。2006年に逝去した蔡潔生の墓苑は台湾で一二を争う広さであったが(敷地面積1700 m²)、殯葬管理条例が定める墓の広さ規制に違反しているとして、蔡家は台北県政府から罰金450万台湾元の行政処分を受けた。台北市で育った蔡は、客家語は話せないし、閩南語もうまくはない。蔡は台湾大学法律系を卒業後、コーネル大学、続いてロンドン大学LSEで国際法を専攻し、修士号、博士号を取得、帰国後政治大学副教授に就任した。李登輝政権で国家安全会議の諮詢委員に登用され、二国論の立案に参加した。陳水扁政権第1期では大陸委員会主任委員(閣僚)を務め、その後2004年に民進党に入党し、比例区選出の立法委員を経て、陳政権第2期の蘇貞昌内閣で行政院副院長(副首相)を務めた。

蔡英文と朱立倫の経歴には、海外で博士号取得、帰国後大学教員を務め、その後立法委員、

行政院副院長を歴任したという共通点がある。クールでクリーンなイメージも共通する。地方行政では桃園県長を2期務めた朱に、中央行政では閣僚を5年以上務めた蔡に分がある。両者とも台北県の出身ではないし、この選挙のために台北県(朱立倫は三重市、蔡英文は永和市)に住所を移したことも共通する。しかし、選挙の経験では差があった。朱立倫は立法委員当選、県長当選・再選の経験があるが、蔡英文は立法委員の経歴はあるが比例区選出なので、本当の選挙は初めてであった。国民党は周を降ろすことで県政の負の評価のリセットに成功したので、市長選挙の争点は、この二人の候補の優劣になった。

台北県は、旧来の農漁村の住民、退役軍人・公務員・教員の住民、それに県外から流入してきた大量の新住民がいる。県内には中国ビジネスに従事する台商も多い。国民党の鉄票地区、地方政治家が影響力を行使する地区、民進党の固定票地区が混在し、台湾の政治社会の縮図を形成するが、台湾全体よりは泛藍陣営が強い。《表3》は、過去3回の県長選挙と総統選挙の結果を集計したものであるが、民進党が泛藍陣営を上回ったのは2001年に蘇貞昌が県長に再選された時の1回だけである。この時の数値を除くと、泛藍陣営は県長選挙でも総統選挙でも安定した強さを見せている。台北県には立法委員の選挙区が12あるが、国民党が10議席、民進党は2議席である。県議員65名のうち国民党・親国民党籍は33名、民進党・台聯籍は19名、郷鎮市の首長29名のうち国民党籍は18名、民進党籍は3名であった。台北県には県全体を包括する地方派閥はないが、郷鎮市ごとにいくつかの有力政治家がいて、複雑な政治関係を形成している。このため過去の県長選挙では泛藍陣営が分裂選挙になり、民進党が漁夫の利を得ることが何度かあった。しかし、1対1の戦いでは民進党の勝ち目は薄い。蘇貞昌が民意調査で高い支持率を得ていたのは極めて異例の現象であり、蘇への高い個人的評価があったことを示している。

《表3》新北市における藍緑陣営の得票率

	泛藍陣営	民進党
1997年県長選挙	59.33%	40.67%
2000年総統選挙	62.75%	36.73%
2001年県長選挙	48.16%	51.31%
2004年総統選挙	53.06%	46.94%
2005年県長選挙	54.87%	44.30%
2008年総統選挙	61.06%	38.94%

※藍緑を判別できない無党籍候補の得票は除外。

この時の数値を除くと、泛藍陣営は県長選挙でも総統選挙でも安定した強さを見せている。台北県には立法委員の選挙区が12あるが、国民党が10議席、民進党は2議席である。県議員65名のうち国民党・親国民党籍は33名、民進党・台聯籍は19名、郷鎮市の首長29名のうち国民党籍は18名、民進党籍は3名であった。台北県には県全体を包括する地方派閥はないが、郷鎮市ごとにいくつかの有力政治家がいて、複雑な政治関係を形成している。このため過去の県長選挙では泛藍陣営が分裂選挙になり、民進党が漁夫の利を得ることが何度かあった。しかし、1対1の戦いでは民進党の勝ち目は薄い。蘇貞昌が民意調査で高い支持率を得ていたのは極めて異例の現象であり、蘇への高い個人的評価があったことを示している。

(3) 台北市の選挙戦

蘇貞昌が出馬表明をした2010年3月は、馬英九政権の満足度が低迷し、立法委員補選で民進党が連勝するという状況にあった。しかし、民進党の党勢回復はまだ途中であったし、党の政策も打ち出せていなかったため、選挙の専門家の多くは馬英九再選の可能性が高いと考えていた。民進党は強力な牽引力を必要としていた。各メディアの民意調査では、蘇貞昌が民進党内の最有力者ということで一致していた。蔡英文は、蘇貞昌の出馬をめぐる政治的駆け引きで脇の甘さを感じさせたし、4月25日に行なわれた馬英九とのテレビ討論会のパフォーマンスもあまりよい出来ではなかった。このため、民進党で馬英九に挑戦できる人物は蘇貞昌という流れが強まっていた。

蘇陣営の選挙戦略は、市長選挙で善戦する、総統選挙につながる戦い方をする、の二点であった。善戦の目安は、謝長廷の得票率40.9%を上回り陳水扁の45.9%に近づけることであった。陳水扁を越えれば「大勝利」である。蘇は、30代の若いスタッフを活用し、情報発信を重視する選挙戦を展開した。それは、3月3日の出馬宣言からスタートした。市内の保安宮の境内という場所の選び方もよかったし、目線を低くした演壇と党内有力者を聴衆に配したセッティングは米大統領のホワイトハウス中庭演説を思わせた。短く7分間にまとめた演説は、蘇貞昌の数多くの演

説の中でも最高の出来であったのではないか。メディア戦略をよく研究していたことを伺わせる。

蘇陣営は選挙活動の目標として「台北超越台北」という一見分かりにくい概念を提起した。蘇は「過去を超越し、族群を超越し、自己を超越する」と説明した。そこには、旧来の台北を越えていきたい、そして自分たちも旧来の思考を越え市長選挙の枠を越えていきたいという願望が込められている。蘇陣営は、「超越」と、オバマが大統領選挙で使った「チェンジ(改変)」とを組み合わせ、選挙のキャッチフレーズとした。

2010 年前半の台湾政治の焦点は ECFA であった。郝龍斌および国民党は繰り返し ECFA で蘇貞昌への攻撃を仕掛けた。蘇は、メディアのインタビューでは、中国と規範を結んでもよいと考えるが ECFA の内容と手続きには問題があるので反対であるとはっきり述べていたが、選挙活動では ECFA にほとんど触れなかった。統一独立問題や族群問題も触れなかった。蘇は、12 年続いた国民党市政は硬直化しているとして、もっぱら市民生活に直接かかわる諸問題を取り上げた。台北市の住宅価格高騰については、市内国有地の払い下げが財団ファンドの地価吊り上げにつながっていると批判し、市が主導して社会的弱者に向けて「社会住宅」を提供していくと語った。市内の交通問題では、忠孝西路のバス専用道路、敦化南北路の自転車専用レーンなど郝市長の交通政策を具体的に批判した。また、台北県長時代の実績として板橋地区の都市開発に頻繁に言及し、隣接する台北市の萬華地区の再開発の遅れを批判した。

蘇の出馬は蘇派の独断であったので、序盤は謝長廷派や他派から揺さぶりがあったが、蘇の勢いが増すにつれ党内の雑音は収まり、支持・期待が高まっていった。蘇が党の政策の解釈権を行使する場面も見られた。それは台北市の松山空港についてであった。中央政府の航空政策により松山空港は国内線、桃園空港は国際線という区分けが長らく維持されてきたが、台湾新幹線の開通により国内線は減便となり松山空港は縮小の流れにあった。しかし、馬英九は市の中心部に位置する松山空港の利便性に着目し、東アジアの大都市市内空港と結ぶというコンセプトを掲げた。郝龍斌もそれを継承し、松山空港は兩岸直行便、そして東京羽田線も就航することになった。民進黨は陳水扁および李應元と謝長廷(共に市長選挙に立候補)が、桃園をハブ空港として発展させ、松山空港は移転し(事実上の廃港)、跡地は市民の憩いの場として整備、周辺はビルの高さ規制が解除されるので高層化し再開発するという青写真を語ってきた。

その背景には環境問題や、市内空港を廃し郊外の巨大ハブ空港に集約する時代の流れがあったが、近年は都心に近い空港の活用にも注目が集まっている。上海虹橋線や東京羽田線は発展の可能性を秘めているので、ここで松山空港廃港を打ち出すのは得策ではなかった。謝長廷派の李應元は『聯合報』に投書し、台北を東アジアの四角形航路(注:台北-上海-ソウル-東京)の一角に位置づけるためには狭隘な松山空港ではなく桃園空港を整備発展させ、空港と台北とを捷運で結ぶことで実現すべきであるという民進黨の従来主張を表明し、蘇を牽制した(李應元「不遷松山 黄金四角變死角」『聯合報』2010.6.16)。蘇は「自分は実務的な人間である。相手が主張しているからといって反対することはしない」として、事実上、馬英九・郝龍斌の松山空港政策を肯定し、民進黨の青写真を否定する発言をした(「蘇貞昌:不主張遷松山機場」『中國時報』2010.6.16)。郝陣営はこの議題で攻勢に出ようと手ぐすねを引いていたが、蘇の一声で、松山空港政策は市長選挙の争点から消えた。

蘇陣営は意識して対決ムードを避けたので、選挙戦は平穏に進行し、盛り上がり欠く感もあった。また、蘇陣営は選挙用の大看板や旗をやめると宣言したので、台北市内は台湾の選挙らしくない普段どおりの光景であった。蘇陣営は序盤・中盤戦では大型集会を行わず、市民との対話の場と位置づけたミニ集会に活動を集中した。3月末から8月末の間に蘇はミニ集会を 240

回こなしたという(「搶攻中間票 蘇貞昌到你家」『中國時報』2010.8.29)。

8月2日、筆者は蘇のミニ集会の一つを観察した。この日の集会は再選を目指す台北市議員簡余晏の応援という形を取った。会場の市議の事務所は20人も入ると一杯であったが、近所の住民50人ほどが押しかけ熱気に包まれた。蘇は自分の政治活動を振り返るビデオを見せて、政治家としての信頼感と統治能力をアピールした。30分ほどの演説では馬英九の対中政策やECFAには一言も触れなかった。大型演説会では見られない質疑応答の時間もあった。熱帯夜のミニ集会は、蘇の独演により楽しさ溢れる「エンターテインメント」と化していた。この分野での蘇の能力は傑出している。

一方、郝陣営の選挙戦略は、藍緑の対立軸を鮮明にして基礎票の優位を活かすことであった。同時に行なわれる市議会議員選挙と里長選挙で国民党が圧倒的に優勢であることも郝に有利であった。郝陣営は「台北起飛」をキャッチフレーズとした。郝がパイロットとして台北を離陸させるという意味である。郝は守りより攻めを重視し、「台北はますますよくなっている」「蘇貞昌には政策がない」と強調し対決姿勢を取った。郝陣営は、立法委員や評論家を集めて「蘇打小組」というチームを作り、対中政策の問題から蘇の過去の実績批判に至るまで幅広く蘇攻撃を仕掛けた。だが、ネガティブキャンペーンの効果は上がらず、逆に郝は足を滑らすことになった。

郝の市政は大失敗があったわけではないが、小さなトラブルは多発していた。攻撃に集中するあまり、市政の足元を固め市民に説明する努力は疎かになった。郝は市の公務員系統の受けがよいと言われたが、その反面馴れ合いの関係も指摘され、市政府の「ネジが緩んでいる」という批判は広がりがあった。中央政府に公務員給与の引き上げを求める考えを示したことも固定支持層を念頭においたパフォーマンスとして議論を呼んだ(「郝龍斌点火: 基層公務員應加薪」『中國時報』2010.8.22)。側近を目立たせる独特のリーダーシップの問題も早くから指摘されていた。4年に一度の選挙は市の運営を検証する機会なので、当然諸問題が表面化してくる。蘇陣営が捷運の運行トラブルや粗雑な道路工事の問題など細かい議題を取り上げる選挙戦術に徹したことで、郝の市政運営に焦点が合わさった。藍緑対決構造にとられない政策議論を期待する声は、台北市民の中に確かに存在したのである。

蘇陣営のイメージ重視のソフトな選挙戦術も成果を上げた。蘇のピンクのポロシャツ、陽気なミニ集会、ロックバンドの演奏を組み入れた集会スタイル、政治家の宣伝らしくない広告ビデオ、You Tube やブログを使った発信は評判を呼び、民進黨の核心的支持者から周辺の支持者へ、そして台北市だけでなく台湾全体へと広がり、「チェンジ」のイメージと中間路線を広くアピールする大きな貢献をした。各メディアの民意調査では、郝と蘇の支持率が五分五分になる局面が出現した。台北市の藍緑の勢力比率からすると考えられない展開になってきた。全国的注目を集める首都決戦で、蘇が郝と互角あるいはそれ以上の戦いを演じたことが、五都全体で民進黨支持者の氣勢を引き上げる効果をもたらした。また、同一の地方自治体で3期目をやるべきではないから新北市には出馬しなかったという蘇貞昌の理屈づけは、台中市で市長をすでに2期務めている胡志強に強烈な圧力を与えることになった。こうして中盤戦は民進黨有利の情勢となった。蘇陣営の作戦は当たったのである。



2010年8月2日、台北市大同区のミニ集会で演説する蘇貞昌。左は民進黨の簡余晏市議。蘇は「簡市議を応援するのは彼女が美しいからではなく仕事ぶりが美しいから」と語り、市議や支持者を喜ばせた。

しかし、台北市長選挙はここで転機を迎えた。民進党の市議員らは、市政府の公共事業および11月開幕の国際花博覧会の経費の無駄遣い問題を取り上げ、郝市政批判に集中していた。8月19日、民進党市議が、新生高架道路下の用地美化のため植生されたツツジが不当に高い価格(市価一株42台湾元のもの345台湾元)で納入されたと暴露した。民進党市議らは無駄遣い批判の材料を探していてこのツツジ価格の問題を見つけ、それが「花」にからんでいたのが花博批判と結びつけた。これは確かに政治的動機が背後にあるが、市の予算の執行に市議が監視の眼を向けるのは当然である。しかし、市政府はていねいな説明を怠り、高飛車な反論に出て反感を買った(「郝團隊太輕忽 花價之火燒到選情」『中國時報』2010.8.28)。やがて市の内部調査で、植え込みの花だけでなく高架道路改修工事全体で調達価格が高いことが判明した。市は事務処理上のミスと説明したが、この公共事業発注をめぐる検察が利益供与の容疑で捜査を開始し、9月7日、発注担当の市政府職員と業者の身柄を拘束した。郝龍斌の選挙情勢は谷底に転落した。藍系の評論家の周玉冠(くさかんむり)はブログに「大勢已去!?(もうだめではないか)」と書いたほどである。

郝市長は、不祥事の謝罪と捜査への協力を表明したが、批判は野党からだけではなく、与党の身内からも出てきた。国民党寄りのメディアでも郝の資質を疑わせる話が掲載された。『中國時報』は、「潜在力を見出すのが難しい」、「首都の市長の仕事をこれほど小さいものにした」、「毎日家に帰って家族と夕食を食べ10時には寝る」という郝への陰口を掲載した(呂紹煒「挽民心 郝團隊當自強」『中國時報』2010.9.6)。『聯合報』は、ある里長が、郝市長に5回も会っているのに郝市長は自分の名前も自分が里長であることも覚えていなかったと不満げに語ったという話を書いた(「首都苦戰 藍昭順 16字訣止血」『聯合報』2010.9.8)。

あまりの批判に、郝は、側近である副市長の李永萍、市政府顧問の莊文思、市長室秘書の任孝琦の3人の解任に追い込まれた。しかし、党内で危機感が共有されるようになったことで、ここから逆に郝龍斌の巻き返しが進行した。郝陣営は、当初は自分の実績と自分の力で再選を勝ち取るつもりであったが、戦術を転換し、郝が落選すれば馬英九も再選できなくなるという危機カード、または馬英九人質カードを使い始めた(「趙少康:輸掉北市 總統大選難逆轉」『中國時報』2010.9.7)。郝に批判的あるいは冷淡であった泛藍の支持者に支援の意欲が戻り始めた。

民進党は藪をつついたら思わぬ獲物が出てきた成功体験から、国際花博覧会の瑣末な問題をたたき続けた。花博の会場内には飾りつけや展示の目的で普段目にする花・植物も多数納入されることになっていたが、その調達価格を調べると多くが市価より高かった。台湾の植物を紹介するコーナーの空心菜(台湾の代表的野菜)の調達価格が高いことが象徴的に取り上げられた。だが、畑でない場所に展示したり、開催時期に合わせて花を咲かせたりする手間がコストに反映されるのは仕方のないことである。この批判を突き詰めていくと、花博のようなイベントは無駄の総本山であるからやらない方がよいということになる。

民進党は花博問題をしつこく攻撃したが、そのような些細な問題ではなくもっと自らの政策・ビジョンを語るべきだと考える選挙民も少なくなかった。加えて、台湾では国際イベントが少ないので、内容は平凡であっても「国際」と名がつけば吸引力があるし、多少お金をかけても盛大なイベントになることを期待する気持ちもある。民進党がそれを否定する印象を与えたのは失策であった。蘇貞昌自身は民進党市議と距離を置き、花博覧会の見学にも行ったが、その印象を打ち消せなかった。市議および市議候補は、自分の選挙の加点を狙い花博攻撃に精を出したのである。その間、蘇貞昌の選挙情勢は伸び悩み、そして下降に転じた。

民進党は花博批判に没頭し、郝龍斌の選挙公約の矛盾も見逃した。郝は高級マンションが並

ぶ都心の一等地に「社会住宅」を建設するという公約を掲げた。これは社会福祉政策を強調する民進党に対抗するためのものであるが、十分な検討をしておらず、経済的効果が疑わしい政策であった。これをわかりやすく例えると、東京の六本木ヒルズの隣に売却予定の国有地があるのでそれを都が借り受け社会福祉政策の一環として低家賃の都営住宅を建設するという公約である。郝がこだわったのは「六本木ヒルズの隣」に建設することであった。これには国民党寄りの『経済日報』と『工商時報』が、その一等地から生まれる収益を使えば社会福祉に向ける予算が何倍も捻出できるとして郝の発想を批判した。内閣からも非現実的というコメントが出てきたが、選挙への悪影響を恐れた呉敦義行政院長が議論を封印した。民進党は型どおりの批判をただけで、本格的な都市政策の議論には入っていかなかった。

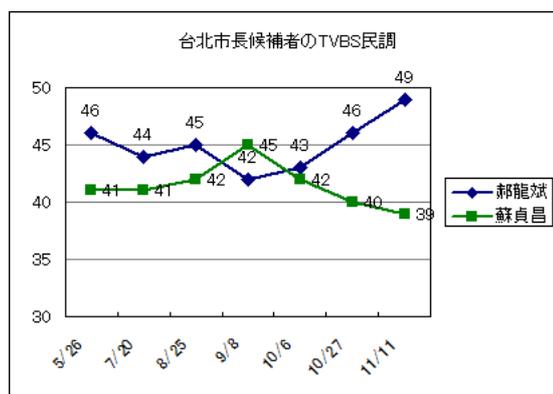
《図1》は、TVBSが台北市の選挙民を対象に行なった「明日投票だとすると誰に投票するか」という質問への回答の半年間の推移である。TVBSの民意調査では、国民党候補の支持が高めに出て民進党候補の支持が低く出る傾向があるので、これまでの経験からすると、民進党候補のグラフは数ポイント分上方移動させると実態に近いものとなる。グラフが接近していれば民進党候補が勝つ可能性が高いのである。9月8日の調査では、蘇が郝を上回った。TVBSの台北市の民意調査で民進党候補の数字が国民党候補を上回ったのは極めて異例である。このグラフでは、7月から10月上旬の間で投票が行なわれていたら蘇貞昌が当選していたと考えられるが、10月下旬以降は郝のリードが明確になった。11月6日には花博覧会が無事に開幕し、8月以降続いていた花博がらみの批判に区切りがついた。その頃には郝陣営は危機的状況を脱していた。

(4) 新北市の選挙戦

新北市では、蔡英文と朱立倫とが対照的な選挙戦を繰り広げた。蔡英文は社会福祉、朱立倫は経済発展を訴えの中心に据えた。蔡英文は宣伝重視の選挙戦を、朱立倫は伝統的な足で稼ぐ選挙戦を展開した。握手した選挙民の数は、朱が蔡の何倍にもなったと思われる。朱は選挙活動を始めて3ヶ月で、台北県の29の郷鎮市、そしてその下の1032の村・里すべてを回ったと語っている。蔡は党主席を兼務しているため物理的に時間の制約があった。さらに、体力的にもペース配分を考えざるをえず、選挙活動で歩ける範囲に一定の影響があった。しかし、全国メディアで報じられる頻度では、党主席である蔡が朱を大きく上回った。蔡陣営は、メディア広告、ネット、看板、ポスターのイメージ戦略を多用し、「I ♥ New...新幸福・新時代」というキャッチフレーズでアピールした。朱陣営のキャッチフレーズは、「倫轉新北市」というやや平凡なものであった。このように両者の選挙活動は異なる特徴を有していたので、台湾メディアは、朱立倫のやり方を陸軍の戦法、蔡英文のやり方を空軍の戦法に例えた（「從政背景相似 朱立倫、蔡英文 陸軍打空軍」『聯合報』2010.8.24）。

台湾の選挙においては、候補者が選挙民と会う・握手する・話しかけるという接触は非常に重要視される。藍緑双方の陣営に固い支持者が多数いる反面、中間票・浮動票も少なからず存在

《図1》 台北市長候補者の支持率の推移



(出所) TVBS 民意調査を参照し筆者作成。

する。支持政党・支持候補が固まっていない選挙民と直接接触することは一定の集票効果がある。筆者も実際に、握手したからその候補に票を入れた、うちの店に来てくれたからその候補に票を入れた、という事例をいくつも聞いている。朱立倫の村・里の訪問は、村長・里長の事務所に行き、村長・里長が呼んでおいた近隣住民と朱が対話するスタイルであった。一日に何ヶ所も訪問するため対話の時間が短いという難点もあったが、お茶を飲んだり何かを食べたりするので握手以上の効果もある。ただ、村長・里長が国民党支持の住民を呼んでおくことが多いので、選挙民の反応がややずれて選対本部に伝わる現象もあったようである。

8月2日、筆者は朱立倫の選挙活動を見学した。この日朱は台北県新莊市の視覚障害者支援施設を訪問した。まず、朱は中庭で盲導犬の訓練を見学した。この日の最高気温は中央气象台の発表で38℃であった。中庭は太陽が直射し頭が焼け焦げそうであった。筆者は3分で日陰に逃げ込んだが、朱立倫は帽子をかぶらず熱心に職員の説明に耳を傾けていた。次に、作業室で視覚障害者の職業訓練の様子を視察した。建物内は蒸し風呂のような暑さであったが、朱の視覚障害者とのコミュニケーションは非常にうまく、見ていて感心させられた。朱は全員と握手した後、施設の玄関前で取材の記者らに福祉政策を発表し一行程を終えた。朱はこのような「訪問・面会・握手・メディア向けコメント発表」の行程を毎日数ヶ所のペースで続けていった。朱立倫の体力・気力は相当のものである。



2010年8月2日、台北県新莊市の台湾盲人重建院を視察する朱立倫。真夏の太陽が照りつける中庭で盲導犬訓練士の説明に熱心に耳を傾けた。

蔡の選対本部は、6月の時点で、主席職の激務や体力的事情を勘案し、序盤は全国メディア露出、中盤は人の多い市場・商店街で握手活動、終盤は連日大型集会という蔡に合わせた短期決戦型の三段階作戦を立てていた。蔡陣営は数ではなく効率重視で、地方人士と非公開で面会する戦術を多用した(国民党系の人物は面会したことを知られたくないので蔡陣営は非公開活動とし訪問先を発表しなかった)。序盤・中盤では民進党の市議候補らからは、朱と比べて蔡の選挙活動が少ないと心配する声も上がった。また、週刊誌の『新新聞』では、蔡は雨が降ると選挙活動を取りやめると書かれた(林雪芬「蔡英文『不擾民』雨天休兵」『新新聞』1234期, 2010.10.28-11.3)。この記事が事実かどうか確認するため、筆者は蔡の選対責任者に直接聞いてみた。回答は、それは事実であるが、その理由は、記事が示唆するように消極的だからではなく、市場や商店街では雨が降る中で選挙活動をするのは人の迷惑になるからとのことであった。しかし、朱立倫は雨が降ろうが風が吹こうが選挙活動を中止していない。蔡の選挙のやり方は、台湾の選挙の常識、特に民進党の選挙の常識とは異なる。民進党の選挙戦においては、過去の権威主義体制の問題、外省人/本省人の省籍の問題、アイデンティティにかかわる問題が重要視されるが、それらは候補者がひたむきにアピールすることによって支持者の共感を得られるのである。民進党が得意としてきたのは、このように人々の心を揺さぶる選挙戦であった。蔡は、演説も身振りも概して冷静でおとなしかった。

台湾の選挙では、候補者や党首が意気込みを示すため「当選できなかつたら辞任する」「引退する」の類の公約が飛び交う。馬英九も2005年県市長選挙で、過半数の県市を獲得できなければ党主席を辞任すると表明した。2008年には謝長廷が、総統選挙で負けたら政界から退くと宣言した。今回の五都選挙では国民党の金溥聰秘書長が、三都を取れなかつたら秘書長を辞任すると公言していた。民進党の呉乃仁秘書長は、国民党に揺さぶりをかけるため辞任レベルを引

き上げる発言をしたが、蔡は、選挙民が冷静に考える空間を確保したいとして、同調しなかった。蔡は、首を賭けて何かを公言する過去のやり方には戻りたくない、選挙民が蔡主席に辞任してほしくないからといって本来投票するつもりでなかった票を自分に投じることはしてほしくないと説明し、従来の政治家像から距離を置いた（「緑 2012 人選 小英提 4 条件」[中央社]2010.10.29）。

選挙公約では両者ともローカルな政策を掲げた。朱は、新北市の都市交通網の整備、中国大陸で活動する台商が台湾に回流できる拠点建設、汐止ハイテクパーク整備、基隆河岸整備などを強調した。蔡も、社会福祉、都市交通、公共空間、雇用創出を掲げた。蔡はさらに「動物に優しい都市」も訴えた。両者とも捷運の整備拡大を唱えたが、朱は特に「三環三線」（3つの環状線と3つの路線の建設）という壮大な構想を提起した。これは国民党が得意とする大型公共建設公約である。蔡陣営は、それに対し、現実的ではない、馬政権が予算をつけていない、民進党政権の時に捷運計画は作っていたなどいくつもの理由をあげて朱の構想を批判した。蔡は建設コストを考えてバスを活用する交通政策を提示したので蔡の方が現実的であったのだが、朱の「三環三線」は新北市にとって「高すぎて買えない高級ステーキ」であると表現したため、逆に朱陣営から「夢がない」と反撃された。蔡は捷運建設に消極的という印象を与え、都市交通議題では朱が優位に立った。蔡の駆け引きに弱いところがまた露呈した。

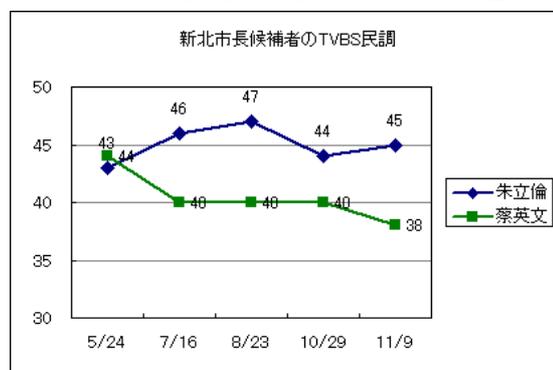
しかし、経済議題では、馬政権が経済成長率を強調しているが庶民には実感がない、国民党は対中ビジネスと大企業ばかりを重視し富の不均衡が拡大しているという蔡の批判に勢いがあつた。蔡は福祉国家・社会民主主義的な理念を強調し、かなりの手ごたえをつかんだ。朱は「市民主義」を提起した。これは民進党の理念に接近し、低所得者、生活弱者、雇用の不安定な層の票を取り合う戦略であった。その他には、国民党は、蔡英文の ECFA 反対、中華民国を亡命政府と位置づけた発言を批判したが、選挙の争点にはならなかった。

《図 2》の TVBS の民意調査では、夏場は足で稼ぐ朱が一步リードしているように見えたが、10月にはかなりの接戦になった。基礎票で優位にある朱が、蔡の追い上げに遭っていた。国民党内では、郝龍斌は危機を脱したが朱が危険な状態だという警戒感も生じた。その一つの要因は、周県長問題であった。周にしてみれば、本来は自分が再選をかけて戦っているはずの選挙で朱の応援に回るということがおもしろいはずはない。周は降ろされた悔しさからか、閣僚ポストや国営企業会長ポストなど中央から提示された処遇を拒否したと言われている。周は、県政府の幹部を動かして朱の選挙を支援すると約束していたが、終盤で応援活動の手を抜いているのではないか、足を引っ張っているのではないかという懸念が朱陣営内部で生じた。その懸念は現場から直接馬英九に伝えられた。馬は周への大変な配慮を示し、朱の応援演説でもまずは周県長の功績を称え、周をなだめた。国民党はぎりぎりのところで時限爆弾の解除に成功した。

(5) 北二都の終盤戦

選挙戦終盤の11月に入ると、《表 4》のように、陳水扁前総統の汚職事件の判決、緑陣営寄りの人物の失言事件など、両陣営の対立軸に沿う出来事が連続して発生した。これらの出来事は

《図 2》 新北市長候補者の支持率の推移



(出所) TVBS 民意調査を参照し筆者作成。

五都全体に影響を与えたが、影響の仕方は北の二都(台北市と新北市)と南の二都(台南市と高雄市)で異なった。花博覧会はすでに述べたように台北市で大きな議論を巻き起こしていたので、11月6日に開幕にこぎつけたこと自体が郝龍斌のプラスになった。実際に入場した人々の評判もそれほど悪くはなかったので、時間の経過と共に郝へのプラス作用は拡大し、花博支持で連携していた朱立倫にもいくらかのプラス効果が生じた。南二都では、花博は争点にならなかった。

陳水扁前総統の汚職事件は複数の裁判が進行しているが、後から始まった第二次金融改革に関する収賄事件に

ついての一審裁判で、11月5日、無罪判決が出た。これには国民党陣営に衝撃が走った。深藍の年配の支持者の中には、裁判所の判決は総統の責任であると誤解している人が少なからず存在する。その人たちは陳水扁に恨みを抱き、馬英九総統が弱腰だから無罪になったという筋違いの憤りを国民党にぶつけるところであった。しかし、その数日後、最初に審理が開始された龍潭土地購入収賄事件と陳敏薰人事収賄事件について最高法院の判決が下り、陳水扁前総統の有罪が確定した。これは、北二都では陳政権の腐敗イメージを思い起こさせ民進党に不利に作用したが、南二都ではこの汚職事件が過去のものと思なされる傾向があり、判決の影響はほとんどなかったようである。



開幕から2週間後の台北国際花博覧会会場。土日は大賑わいで、テーマ館の入場整理券は午前中の早い時間になくなった。2010年11月20日撮影。

《表4》 選挙戦終盤に発生した主要な出来事

11月5日	第二次金融改革に関する収賄事件で陳水扁前総統に一審無罪判決。
11月6日	台北花博覧会開幕。8月以降続いていた花博がらみの批判に区切り。
11月7日	緑陣営寄りのテレビ討論番組の司会者鄭弘儀が台中市の蘇嘉全の応援演説の場で馬政権の対中政策を批判。放送禁止の下品な用語で馬総統を個人攻撃したため逆に批判を受けた。鄭弘儀は失言として謝罪。
11月11日	龍潭土地購入収賄事件と陳敏薰人事収賄事件の2件について、最高法院で陳水扁前総統の有罪(懲役17年半)が確定。
11月17日	広州アジア大会でテコンドーの楊淑君選手失格。合理的根拠は乏しいが、判定の背後に韓国・中国の関係者が関与したとし反韓・反中感情が広がる。体育委員会副主任が「判定結果を呑み込む」と発言し、馬政権の失点となった。副主任は辞任。
11月21日	台北市で郝龍斌陣営のパレード。藍緑陣営の対決ムードがじわりと高まる。
11月24日	民進党の呉乃仁秘書長が記者懇談会で、党則では市長当選者の総統選挙出馬を禁止していないと発言。蘇貞昌と蔡英文が当選後総統選挙に出馬するつもりだという印象を与える。
11月26日	台北県永和市の国民党市議候補の選挙集会で、連勝文が地元のチンピラに銃撃される。

11月7日には失言事件が発生した。緑陣営寄りで知られるテレビ討論番組の司会者鄭弘儀が、台中市の蘇嘉全候補の応援演説の場で馬政権の対中政策を批判したのだが、その際、放送禁止の下品な用語で馬総統を個人攻撃した。深緑の支持者は喝采を叫んだが、中間派選挙民には反感を抱く人もいた。下品な言葉遣いは両陣営とも珍しくはないが、放送禁止用語を使ったのは不適切であった。鄭弘儀は民進党員ではないが、国民党はこの機を捉えて、民進党は粗野であるという大々的な批判キャンペーンを行なった。鄭は失言として謝罪した。この事件は、北

二都で民進党に不利に作用したと考えられる。この失言事件直後の TVBS の民意調査の蘇貞昌と蔡英文の数字にそれが表れている(図1と図2を参照)。しかし、南二都では民進党へのマイナスの影響はほとんどなかったし、一部では民進党陣営の氣勢が上がったと考える人もいた。

投票10日前の11月17日、今度は中国で開催されていたアジア大会が台湾の五都選挙に影響を与えた。この日、広州アジア大会のテコンドーの試合で台湾期待の楊淑君選手が出場したが、一回戦の試合の途中で失格の判定を受けた。規格外の防具を使ったためとされるがその判定は不可解であり、台湾では、テコンドー界を牛耳る韓国と開催国である中国の関係者が背後で介入し優勝候補の楊選手を狙ったという憶測が広がった。台湾の女性選手が中国の試合で不当な扱いを受けたという認識ができあがった。政府のスポーツ担当者である体育委員会副主任が、早々と「(国際試合なので)判定結果を呑み込むしかない」と発言したため、政府がやるべきことをしなかったとする批判が沸騰し、馬政権の失点となった。

ある大手メディアの民意調査担当者から聞いた話では、内部の民意調査で国民党候補にマイナス、民進党候補にプラスという形ではっきりと事件の影響が現れたという。筆者が話を聞いた蘇貞昌、蔡英文、陳菊の選対本部関係者も、この事件は自候補に有利に作用していると分析していた。テコンドーの判定から発した反韓・反中感情は合理的根拠が乏しいし、それは台湾の民衆もわかっていると思われるが、馬政権が中国に対し台湾の主体性を十分主張していないという疑念が背景にあったため不満の捌け口にされたようである。中国は選挙前に中台関係で事件が発生しないように注意していたが、まったく予想外の所で予想外の性質の事件が発生した。

選挙戦の終盤で各種の出来事がめまぐるしく発生するのは、台湾の選挙でおなじみの光景である。これらの出来事は、両陣営にとってプラス・マイナスが交錯し、総合的にどちらに有利に作用したのかの判断は難しい。影響は一時的であり、時間が経てばもとの基本構図に戻ったようにも見える。しかし、藍緑二極構造のエネルギーがじりじりと高まったことは確実である。このような動きは、藍緑の対決を避けて候補者の統治能力と人柄を強調する選挙戦を展開してきた蘇貞昌に不利に作用した。郝龍斌はこの構図の中で巻き返し、優位を確保できた。新北市では、必ずしもこの構図は現れなかった。一方、高雄市や台南市ではこの構図が民進党のプラスになった。一つ一つの出来事が台湾の南北で異なる反応を引き起こし、それぞれの地域で国民党と民進党の強い方の支持がより強くなるという作用をしたようである。

投票の1週間前、北二都の候補者の選挙活動を観察した。11月21日、郝龍斌は朝8時から民族東路の濱江市場で握手活動を行なった。ここは中山区内の民進党の支持がやや高い地区である。市場や商店街の人たちは郝が来ればニコニコ握手はするが、多くの方はそれほど喜んでいいる風には見えなかった。郝は、よい人らしいという感じはするが、候補者としてのカリスマ性がやや欠けているように見えた。一緒について握手している金溥聰秘書長の方が、貫禄があつてさまになっていた。

この日の午後、郝陣営は大規模な市内パレードを行なった。台北市政府前を出発し、中心部の忠孝東路—新生南路—仁愛路を経て、終点のケダガラン路で集会というイベントであった。筆者はパレードが出発してすぐの地点で高い所に登り、先頭から最後尾まで行進参加者を大雑把に数えてみた。実際に歩いた人の数は2万人を超えたが3万人はいなかったのではないかと思う。道路横の見物人を



2010年11月21日、台北市中山区の濱江市場で握手活動の合間に取材を受ける郝龍斌。記者の関心は隣に金溥聰秘書長に向かいがちであった。

含めれば3万-5万人という発表も可能であろう。パレード参加者数は国民党が目標とした5万人より少なかったが、ほとんどの人が終点まで歩いて集会に参加したので、台北の国民党は一定の動員力と結集力があることを示す効果があったと言える。19日に話を聞いた国民党の台北市党部主任委員が「藍系の支持者の投票意欲が戻ってきた」と語っていたが、パレードの参加者数でそれが裏づけられた。

しかし、イベントの主役である郝龍斌の存在感は薄かった。普通なら周囲の注目が集まるので遠くからでも近づいてくるのがわかるのだが、あまり目立たなかった。取材をしていた日本メディアの記者の中には、郝が通りすぎたのに気がつかなかった人もいた。パレードは大きな風船人形や仮装行列隊もありそれなりに楽しめたであろうが、熱気があるというわけでもなく、静かに進行し終了した。路上で「ドンスアン(当選)」の声もかき消されたが、唱和する声は小さめであった。

ケダガラン通りの集会では、主役は候補者の郝ではなく馬英九であった。馬英九は、演説の冒頭でテコンドーの楊淑君事件に触れ政府の努力を強調した。次に、経済に集中して政権の実績を語り、成長率、失業率、一人当たりGDP、国際競争力ランキングのいずれもが改善したことを、数字を並べて説明した。購買力平価で換算すると台湾の一人当たりGDPが日本に並ぶという非常に細かいことにも言及した。この集会の開催のテーマであった司法改革は一言も触れなかった。朱立倫も応援演説に駆けつけ、北二都の国民党の連携をアピールした。選挙期間中、郝と朱が頻繁に相互応援をし連携をアピールしたのに対し、蘇と蔡が合同演説をしたのは1回だけであった。大勢に影響しないとはいえ、多くの選挙民は北の二都が連携できるほうが好ましいと思ったであろう。

蘇貞昌の活動は、11月20日の萬華青年公園での音楽会と、21日の金華国中での大型集会の二つを観察した。前者の開催場所は、眷村を建て替えた集合住宅が並び年配の外省人住民が多い地区である。後者は、中正・大安・文山という国民党の支持が強い地区の住民を対象に開催された。前者は土曜日の午後で、公園の一角の野外ステージは約1000人が集まり一杯になった。後者は「超越晚会」と名づけられた終盤の大型集会の一つで、会場の中学校の運動場は人で一杯になり、外には入りきれない人がかなりいた。中だけで5000人、出入りした人を入れて全体で約1万人の参加者があったのではないかと思う。

集会は、ロックバンド「董事長樂團」が蘇陣営のテーマ曲「我們要改變」を演奏し、その後で蘇が手の振りつけを参加者に教え、みんなで一緒に歌うという演出であった。蘇の演説のうまさ、聴衆を引きつける話術は、いまの台湾で一番である。蘇は、藍緑の対立よりもガバナンスの能力、行政効率性が重要とアピールしていたが、相手批判のボルテージも上がっていた。郝市政の批判はかなり詳細で、花博開幕イベントの花火の無駄使い、捷運文湖線の車両設計の悪さ、道路補修工事の効率の悪さ、南京西路ロータリー内屋台の再生の失敗、士林夜市の改修の遅れ、台湾大学前の改築された水源市場の4階が使われないまま放置されていることなど、細かすぎるかと思うほど具体的であった。少子化、学校の安全、老人大学など教育福利政策も時間をかけて説明した。蘇は、台北を美麗都市にする、自分ならそれができるとアピールして演説を終えた。

蘇貞昌は、2007年5月に予備選挙で謝長廷に敗北し行政院長を辞任してから2010年3月の台北市長選出馬までの間、充電・学習の時間があった。これは、毎日目先のことに追われる政治家にとって貴重なまとまった時間である。蘇はその間に、アイデンティティの戦いを薄め統治能力で勝負する中間路線を暖めてきた。五都選挙の民進党の五候補はいずれも中間路線を標榜しているが、蘇はまさに「領頭羊(群れの先頭に立つ羊)」のごとく、斬新な手法で中間路線を牽引し、それを広くアピールする貢献をした。しかし、蘇の「超越晚会」には既視感もあった。1994年

の台北市長選挙で「快樂・希望」の旗を立てた陳水扁の選挙集会とよく似ているのである。陳水扁も演説がうまく、人を引きつける能力は抜群であった。違いは、陳水扁のテーマ曲「春天花蕊」が演歌調であったのに対し、蘇のテーマ曲「我們要改變」はロック調であることなのだろうか。

この既視感は、民進党が勝つための選挙戦略は限られているということを示唆するかのようでもある。民進党の歴史は、大雑把に言うと、初期の民主化選挙の時期は台湾ナショナリズムを打ち出し、途中で陳水扁が中間路線に軌道修正を図り、その後政権担当中に徐々に台湾ナショナリズム寄りに移動したのを、今度は蘇貞昌がまた中間路線に引き戻すという大きなサイクルの中で動いているのかもしれない。それは、左右にゆれながら進化しているのか、それとも同じところをぐるぐる回っているだけなのか。台湾の選挙民の多くは陳水扁が掻き立てた「希望」の結末を知っているだけに、この既視感が蘇にとって壁になる可能性がある。

蘇のテーマ曲は「我們要改變(我々は変革を必要とする♪)…人民是頭家(人民が主人♪)」というフレーズで始まる。在野にある民進党の支持者に「人民が主人」というフレーズは心地よく響くし、「人民が主人」の観点から馬英九や郝龍斌を批判することも効果的である。しかし、自らが政権に就いた時に、台湾の政治制度の中に「人民が主人」の理念をどう取り込んでいくのかについての議論は欠けている。蘇の選挙戦略には、他の政治家と同様に、まずは勝つこと、何をどう行なうかは勝って権力を握ってから、という発想が感じられる。これは、「オレに任せておけば大丈夫」という家父長制的政治家観に通じる。台湾では家父長制的政治家観が根強いので蘇の選挙戦略は間違いではないが、他方で、「人民が主人」は人民主権の理念であり、家父長制的政治家観とは対立する。選挙民がいちいち政治理論を議論するわけではないので、ムードをひたすら高めればそのあたりはあいまいにすませることができるのかもしれないが、政治参加のあり方、権力監視の方法など語れることは多々あるはずだ。

新北市では、蔡英文と朱立倫の演説を聞き比べてみた。11月20日、樹林市(現在は区)で蔡英文の大型集会を観察した。樹林は藍緑が五分五分の地区である。民進党は4000人ほど収容できる会場を準備していたが一杯になり、途中で参加者を詰めさせたが、それでも両脇は立ち見で、合計6000人くらいはいたのではないかと思う。司会は、蘇側近の呉秉叡と蔡側近の蕭美琴が仲良く務めた。ダンスパフォーマンス、市議候補の紹介をはさんで、応援演説は李應元、謝長廷、林義雄と進んだ。林義雄元民進党主席は、さすがに重みが違う。林が朴訥とした話し方で、「蔡をよろしく」と聴衆に頼むとジーンとくる。林には他の人になくカリスマ性がある。林が蔡にお墨つきを与えるこのパフォーマンスは、蔡が総統候補になった場合、中南部でかなりの効果を上げそうである。蔡英文の演説内容は、政府の役割を強調する福祉国家路線であるが、メディアのインタビューの公式発言よりも演説では左派路線がより強調されていると感じた。低所得者向け「社会住宅」建設、雇用の確保、子供・高齢者への福祉供与拡大、社会的弱者にやさしいコミュニティ作りなどの社会福祉政策を次々に挙げ、中央政府がやらないなら五都からやっていくと語ったが、財源については一言も触れなかった。



2010年11月20日、台北県樹林市の選挙集会で民進党市議候補を紹介する蔡英文。隣に林義雄元民進党主席が立つ。

11月21日、三重市で朱立倫の演説を聞いた。これは、三重が地盤の市議候補陳幸進(台北県議会議長)との合同集会であった。朱が入場してきた時の女性支持者の声援はものすごく、人気が高かった時の馬英九を思わせる。県議会議長の動員系統なので偏りがあると思うが、30代

40代以上と思われる女性支持者が多かった。候補をひと目見たいというこの雰囲気は、郝龍斌の場にはなく、朱にはあるのである。朱の選対関係者が、女性票の獲得に自信を示していたが、それが裏づけられた形である。この関係者は、蔡の福祉政策で子供・母親・子育て支援が特に強調されているが、台北県では、蔡が独身であることを理由に違和感を抱く女性選挙民が少なからずいるという指摘をしていた。朱立倫は演説が非常にうまい。民進黨批判はそれほど強烈ではないが、捷運建設、経済活性化など自分の政策を語り、聴衆の反応はよかった。閩南語がなめらかであるし、何より声が力強い。候補としての強さは十分感じられた。

それに対して蔡の演説は、力強さに欠け、平淡で大学の講義のようである。しゃべっているのが蔡でなければ眠くなるかもしれない。しかし、11月20日の蔡の集会は独特の雰囲気に包まれていた。台湾で女性政治家は珍しくないが、選挙を勝ち抜く女性県市長や女性議員らは強烈な個性を内に秘めた特有の外見と雰囲気を備えている。蔡英文の外見は、そうした女性政治家と比べると、いかにも普通の人という印象を免れない。蘇貞昌の演説はまったく安心してリラックスしながら聴いていられる。蘇が1人で自然に盛り上げてくれるからだ。他方、蔡英文の演説は、彼女がちゃんと演説できるのか、十分盛り上げることができるのか何となく心配があり、聴衆に幾分の緊張感がある。実際、蔡は演説全部を閩南語で通すことができない。その分、聴衆が候補を盛り立てようという暖かい雰囲気がみなぎっていた。野外集会では人の出入りが多いのが普通だが、蔡の演説中は一体感があり、立ち上がって帰った人は少なかったと思う。集会参加者、特に前半分に座っている熱心な支持者は、「オレが・ワタンが主席を守る」という気持ちになっているように感じられた。若い女性も多いとは言えないが来ていたし、おばさんたちも熱心だったが、一番熱心なのは中高年のおじさんたちであった。初の女性党首ということで、支持者も新しい経験をしているのかもしれない。基礎票で差があり選挙活動でもやや遅れのあった蔡が終盤で風を起こした要因の一つは、候補として珍しいキャラクターにあったようである。

北二都の選挙戦を通じて、蘇貞昌と蔡英文が当選した場合総統選挙に出馬するのかわからないのかの憶測・議論は絶えなかった。国民党は繰り返しこの点を突いた。10月の『聯合報』の民意調査では、蔡英文が市長に当選したら任期を全うすると信じて回答したのが55%、任期途中で転進すると考える回答したのが16%であった。もし蔡英文が当選し途中で総統選挙に出馬することになれば、「受け入れられない」が51%、「受け入れることができる」は28%であった（『聯合報民調／不滿意度 朱立倫低於蔡英文』『聯合報』2010.10.30）。このことからわかるのは、蔡英文の誓約はあいまいであるが、多数の市民がそれなりに納得し、また、任期途中で総統選挙出馬は認められないと考えていたということである。蘇貞昌は、「当選したら4年の任期を全うする。総統選挙には出ない」と繰り返し、議論に蓋をした（『台北市／蘇貞昌：選贏市長就不選總統』『聯合報』2010.8.16）。

民進黨の呉乃仁秘書長は、「五都のうち二都しか取れなければ負けだ。あえて手抜きをする候補がどこにいるか」と効果的に語り、蘇あるいは蔡が意図的に落選し総統選挙に出馬するという憶測を否定した（『呉乃仁：保2 就算輸誰敢選假的』『中國時報』2010.10.28）。しかし、選挙期間も残り3日を切った11月24日、呉秘書長は手痛い失言をした。呉は記者懇談会の場で、総統に当選する可能性の最も大きい人物が民進黨を代表して出馬するであろう、党の規則には五都市長に当選した人物が総統選挙に出馬することを妨げる条項はない、という趣旨の発言をし、蘇あるいは蔡が当選後総統選挙に出馬するつもりだという印象を与えた（『呉乃仁：誰最可能當選誰就出線選總統』『聯合報』2010.10.25）。呉は党内の総統候補決定のプロセスを質問されたので、客観的に説明しただけのつもりであったが、記者は聞き逃さなかった。この発言が蘇と蔡の選挙

情勢に水を差したかどうかはわからないが、少なくとも、国民党側が最後の3日間の攻撃材料を得たことは間違いない。この記者懇談会のビデオを見ると、茶菓子がつきリラックスした雰囲気、質疑応答が行なわれている。呉秘書長はこの種の質問を十分注意していたはずであるが、あとわずかで選挙戦を終え自分の役目も終了するというで気が緩んだのかもしれない。

選挙戦最終日の夜、台北県永和市の国民党市議候補陳鴻源(台北県議会副議長)の選挙集会で銃撃事件が発生した。応援演説を始めようとした連勝文が地元のチンピラに銃撃され、銃弾が顔面を貫通し、連勝文は病院に搬送された。事件は直ちに全国メディアで報じられ、人々を震撼させた。事件の被害者が連戦元国民党主席の息子であったため、北部では同情票が出て国民党にプラスに働き、逆に南部では民進党に票を結集させる動きにつながったようである。連勝文は軽傷で、数日後に退院した。検察は、約2ヶ月の捜査の結果、犯人の林正偉(48歳)は私怨により陳鴻源副議長を銃撃しようとしたが、人違いでステージ上にいた連勝文を銃撃したのが事件の真相であると発表し、林を起訴した。

『聯合報』と『中國時報』が選挙直後に行なった民意調査では、銃撃事件で影響を受けたと解答した人の比率はどちらの調査でも4%であった(「聯合報民調／五都一役 36%緑勝 24%藍贏」『聯合報』2010.11.29, および、「本報民調 5 都選挙結果 半数國人滿意」『中國時報』2010.11.29)。「影響を受けた人4%, うち国民党に票を入れた人2%, 民進党に票を入れた人1%, その他1%」という『中國時報』の調査結果に基づいて人数を計算すると、影響を受けたのが42万7000人、うち国民党に票を入れたのが21万3000人、民進党に票を入れたのが10万7000人と大雑把ながら推測ができる。国民党に有利な票の動きが台北市と新北市で比較的多く現れたと仮定すると、銃撃事件の影響は、当落を変えなかったかもしれないが相当大きかったことになる。台湾では信頼のおける出口調査が行なわれていないので事件の影響を検証することは困難であるが、『聯合報』と『中國時報』の民意調査を参照すれば、事件がなければ郝龍斌と蘇貞昌との得票差、および、朱立倫と蔡英文との得票差はもっと小さかったであろうと言ってよさそうである。

(6) 台北市の投票結果

台北市長選挙の結果は、《表5》のように、郝龍斌が約79万8000票、蘇貞昌は約62万8000票獲得した。投票率は70.65%であった。郝は苦しみながらも終盤で蘇を突き放し、約17万票の差をつけて再選をものにした。蘇貞昌の43.8%という得票率はどのような位置づけになるのか検討してみた。この数値は、謝長廷の得票率40.9%を上回り陳水扁の45.9%に近づけると蘇陣営の目標からすると悪くないように見える。目標には届いたのである。しかし、選挙のプロセスにおいて蘇陣営の選挙戦略がうまくいき期待値が高まっていたので、支持者の間では達成感は薄い。約17万票の差は予想外の大差であった。

台北市内の12区別の蘇貞昌の得票構造を分析してみる。蘇の得票率が最も高かったのは大同区の57.6%、最も低かったのは文山区の34.3%である。これを前回の謝長廷の得票率と比較してみたい。《表6》は、今回も含め5回の台北市長選挙における民進党候補の得票率の推移を市内の12区別に示し、蘇の得票率の高い順に並べたものである。2006年の謝の得票率の最大は大同区の56.3%、最小は文山区の30.6%で、蘇の場合と同じである。それだけでなく、12区の謝と蘇の得票率の順位はまったく同じである。蘇の得票率は謝と比べて2.9ポイント上昇したが、各区の得票率もそれに対応して上昇しただけである。投票率が6ポイントも上がったというの

《表5》台北市長選挙結果

	得票率	得票数
郝龍斌	55.65%	797,865
蘇貞昌	43.81%	628,129
その他3名	0.54%	7,742

に、たいした変化は見られない。

選挙前に蘇陣営が期待をかけていたのは内湖区・南港区であった。この両区は再開発が進み、ハイテク・情報通信関連の企業が数多く進出し、町並みは一変した。流動人口が増え、国民党の組織力が及ばない中間票が増えていると見られていた。謝の得票率と比べて南港区での蘇の上昇幅は3.9ポイント、内湖区は2.9ポイントであった。南港区の上昇幅は確かに12区で最大であったが、蘇陣営が期待したほどではなかった。蘇の選挙活動は、謝のそれよりはるかに綿密で、期間も長く、運動それ自体としては成功していた。謝の出馬の決断は臨時のもので、準備は出遅れ、選挙活動も当時の「倒扁運動」に押されていた。相手は同じ郝龍斌であるが、今回は満足度が低迷し現職の重荷を背負った候補者であった。これらのことを考慮すると、蘇貞昌の伸びは「わずか」2.9ポイントであったという見方にならざるをえない。

次に、蘇貞昌の得票を民主化の出発選挙となった1994年の陳水扁の得票と比較してみる。蘇の得票率43.8%は、陳水扁の43.7%とまったく同じである。角度を変えると、郝龍斌の得票率55.7%は、当時の趙少康と黄大洲の得票率の合計56.1%とほとんど同じである。12区別で見ると、陳水扁の得票率の最大は大同区、最小は文山区で、これも蘇と同じである。順位に変動があったのは1994年に3位であった中山区が5位になっただけである。今回の蘇と1994年の陳水扁とは、得票率が同じであるだけでなく、各区の得票構造もほとんど同じである。

《表6》台北市長選挙における民進党候補の各別得票率

	1994年	1998年	2002年	2006年	2010年
候補者	陳水扁	陳水扁	李應元	謝長廷	蘇貞昌
大同区	59.46%	59.00%	48.65%	56.27%	57.63%
士林区	50.95%	52.19%	42.40%	48.60%	50.93%
萬華区	48.46%	49.68%	40.12%	46.45%	49.70%
北投区	48.02%	49.39%	39.37%	45.41%	48.65%
中山区	48.96%	50.04%	40.17%	45.50%	47.41%
南港区	43.50%	46.29%	34.26%	40.51%	44.39%
内湖区	41.86%	43.92%	33.46%	38.37%	41.25%
松山区	41.32%	44.88%	34.99%	38.13%	40.49%
中正区	39.18%	42.60%	33.06%	36.86%	40.21%
信義区	38.11%	41.81%	31.69%	36.62%	39.91%
大安区	35.99%	40.31%	31.08%	34.24%	37.49%
文山区	34.03%	36.39%	26.75%	30.64%	34.29%
全体	43.67%	45.91%	35.89%	40.89%	43.81%

5回の市長選挙を通してみると、馬英九人気絶頂であった2002年に李應元の得票率が大きく落ち込んでいるが、それでも民進党候補の得票率は10ポイントの範囲内に収まり変動は限られている。民進党候補の各区の得票率の傾向は、最大の大同区から最小の文山区の枠の中で毎回ほぼ同じである。台北市はこの16年間、都市の再開発が進み、新しいマンションが建ち、住民の移動もあり、社会的には大きな変貌を遂げてきたが、各区の投票パターンは驚くほど固定化している。そしてこの16年間、周知の通り、台北市長選挙では陳水扁の当選・落選という大きな出来事が発生したし、中央レベルでは初の民進党政権の登場と国民党政権の復活という大きな出来事があった。台北市長選挙は、それをあざ笑うかのように、ぐるりと一回りして1994年のスタート地点に戻ったように見える。

市長選挙で藍緑支持構造が固定化していることはわかったが、台北市の政治変動の有無を検討するため、もう一段踏み込んで市議会議員選挙の動向もチェックしておきたい。市議員選挙は、中選挙区制度のため理論上無党籍候補の存在空間がある。市議員選挙では国政上の争点が薄まるので、固有の支持層の外では政党帰属意識に基づく投票行動は薄まる。無党籍の候補者でも、個人票・浮動票を獲得できれば十分当選できる。選挙民からすると、藍緑対決となる市長選挙に比べて市議員選挙の方が、選択肢が多い。各党の公認候補は、中間票・浮動票

の獲得も重要であるが、まずは組織票あるいはその党の忠実な支持者を固めようとする。そのため市議員選挙での各党公認候補の得票率は、各党の基礎力がある程度反映されていると見なすことができる。

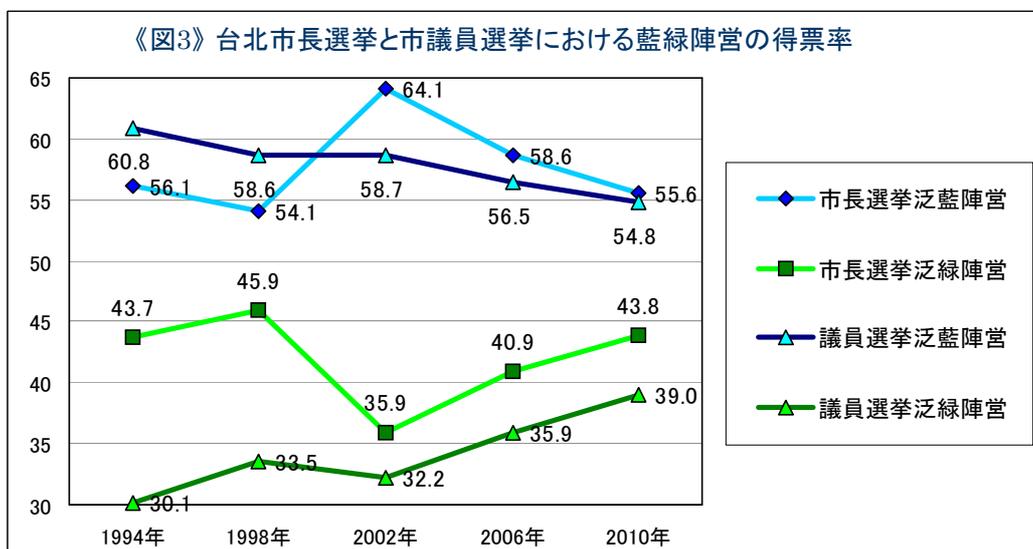
《表 7》 台北市議員選挙における藍緑陣営得票率

過去5回の市議員選挙の各党得票率を、泛藍、泛緑、無党籍その他にまとめたものが《表 7》である。泛藍陣営の各党の得票率の合計は、1994年の

	1994年	1998年	2002年	2006年	2010年
泛藍陣営	60.8%	58.6%	58.7%	56.5%	54.8%
泛緑陣営	30.1%	33.5%	32.2%	35.9%	39.0%
無党籍その他	9.1%	7.9%	9.1%	7.6%	6.3%

60.8%から2010年の54.8%へと5ポイント低下した。一方、泛緑陣営の各党の得票率の合計は、1994年の30.1%から2010年の39.0%へと約9ポイント上昇した。市議会議員選挙の得票率で見ると、泛藍はゆるやかではあるが低下のトレンド、泛緑は上昇のトレンドにあると言える。国民党だけを見れば前回に比べてわずかながら得票率が上がったが、新党と親民党の得票率が減少したので泛藍陣営としては低下のトレンドが止まらなかった。泛緑陣営のうち民進党に絞ってみると、その得票率は前回と比べて5.6ポイントも伸びた。民進党は党勢回復どころか、台北市の基礎票が党史上最大となったのである。大きな注目を集める市長選挙では泛藍陣営優位の構造が続いているが、それほど目立たない市議員選挙では泛藍陣営低下の傾向が観察できる。これがトレンドとして成立するのであれば、海底の深いところでの変化がいずれ海面にも現れるであろう。

市長選挙と市議員選挙における泛藍と泛緑の得票率のグラフを重ねたものが《図 3》である。これにより、両陣営の基礎票と、浮動票も含めた広い支持とを見分けることが可能になる。1994年を例にとると、泛緑陣営(当時は民進党のみ)の市議員選挙の得票率は30.1%にすぎないが、市長選挙の陳水扁の得票率は43.7%に達している。この差13.6ポイントは陳水扁が獲得した中間票・浮動票であり、当時の陳水扁の強さを現している。1998年も陳水扁が基礎票を12.4ポイント上回り、かなりの中間票・浮動票を獲得した。逆に、泛藍の市長候補は陳水扁に票を奪われ、基礎票を固めることもできなかった。1998年の馬英九もそうである。2002年は馬英九が中間票・浮動票を獲得した。2006年は郝龍斌と宋楚瑜の得票率を合計しても泛藍陣営の基礎票を少し上回ったにすぎない。2010年の郝の得票率は基礎票とほとんど同じである。郝陣営の選挙戦術が基礎票固めに集中していたことがこのグラフでも確かめられる。投票日前日の銃撃事件がなければ、あるいは郝の得票率は基礎票を下回ったのかもしれない。



陳水扁以降、泛緑陣営の基礎票への上乗せは、李應元が3.7ポイント、謝長廷は5.0ポイントであった。蘇が今回上乗せしたのは4.9ポイントで、謝と変わらない。民進党の市議候補らの間では郝龍斌と馬英九を強烈に批判し藍緑対決構造の中で票を固めようという選挙戦術が多かったのに対し、蘇貞昌は中間路線にシフトし中間票・浮動票を集めようとした。このことを考慮し、筆者は、蘇の上乗せ幅は謝より大きくなるとの仮説を立てたが、結果はそうはならなかった。数字の上では、蘇の中間票・浮動票獲得能力は特に高くはなかったことになる。

ただし、この結論を一般化するのは適切ではない。これはあくまでも台北市での検証であり、蘇陣営の選挙キャンペーンは最初から台湾全体への情報発信を意図していたので、その評価は異なってくる。すでに触れたように、台北市の支持構造は台湾全体から見ると異質である。さらに、台北市の中間票・浮動票の割合が大きいのか小さいのかにも注意が必要である。台北市議員選挙における無党籍その他候補の得票率の合計は毎回10%に満たないので、台北市では藍緑の政党対決構造が相当深く浸透し、その分中間票・浮動票の総量は限られていると言える。新北市では無党籍その他候補の得票率の合計は21-28%の間にあるので、台北市の中間票・浮動票の割合は新北市より小さいということになる。蘇貞昌の選挙戦略を台湾全体で展開した場合には、台北市とは異なる結果を生み出す可能性は十分あると考えられる。

(7) 新北市の投票結果

新北市長選挙の結果は、《表8》のように、朱が約111万票、蔡が約100万票を獲得し、その差は約11万票という激戦であった。投票率は71.3%であった。朱立倫は蔡英文にかなり追い上げられたが、基礎票の差に助けられ当選をものにしたと言える。蔡英文の47.4%という得票率はどのような位置づけになるであろうか。この数字は、前回の羅文嘉と比べて3.1ポイントの上昇で、蘇貞昌が再選された時の51.3%にはおよばないが、それに次ぐ好成績である。

《表8》 新北市長選挙結果

	得票率	得票数
朱立倫	52.61%	1,115,536
蔡英文	47.39%	1,004,900

郷鎮市レベルの得票構造を見るため《表9》を作成した。これは過去3回の台北県長選挙および今回の新北市長選挙における民進党候補の得票率を29の郷鎮市(昇格後はすべて区)別にまとめ、さらに蔡英文の得票率の高い順に並べたものである。郷鎮市で蔡英文の得票率が最も高かったのは茶畑が広がる坪林郷(区)の63.1%、最も低かったのは都市化が進む新店市(区)の34.3%であった。前回と比べた伸び幅が最も大きかったのは北部海岸沿いの漁村と農村が広がる金山郷(区)の8.8ポイント、次いで萬里郷(区)の7.4ポイントであった。過去4回の民進党の郷鎮市別の得票率は、坪林郷が最も高いのは変わらないが、2001年の蘇貞昌再選時の投票行動が攪乱要因になっていて、全体としてみると変動が大きい。

《表9》 新北市長(台北県長)選挙における民進党候補の区(郷鎮市)別得票率

	1997年	2001年	2005年	2010年
候補者	蘇貞昌	蘇貞昌	羅文嘉	蔡英文
坪林郷	55.05%	77.39%	60.62%	63.05%
貢寮郷	58.81%	64.60%	55.89%	60.89%
石碇郷	47.33%	65.51%	56.08%	59.50%
蘆洲市	50.32%	60.75%	52.95%	56.23%
三重市	49.26%	60.45%	53.43%	55.30%
平溪郷	40.96%	64.13%	48.95%	53.85%
五股郷	37.11%	57.20%	49.40%	52.97%
新莊市	47.08%	57.69%	50.08%	52.94%
金山郷	42.21%	60.58%	44.09%	52.89%
鶯歌鎮	44.86%	59.82%	48.37%	51.58%
樹林市	48.57%	56.94%	49.11%	51.32%
板橋市	45.13%	54.53%	47.40%	50.29%
泰山郷	40.01%	54.63%	46.97%	50.21%
雙溪郷	45.24%	56.59%	46.47%	49.41%

新北市は、面積は広いが人口が少ない地区と人口密集地区とが混在する。選挙の当落という観点から見ると、影響が大きいのはどうしても旧台北県時代の10市(現在は区)になる。これらの区は選挙人数12万人以上で、10区だけで新北市の選挙人総数の8割を占める。これら10区は地理的に4つのグループ、すなわち、①グループ(蘆洲, 三重, 新莊), ②グループ(樹林, 板橋, 土城), ③グループ(汐止), ④グループ(中和, 永和, 新店)に分けることができる。①は雲林県など中南部からの移住人口が多く民進党の地盤である。②は中間票が多い地区と見られている。④は軍・公務員・教員関係者が多く国民党の固い地盤である。蔡英文は、①で勝ち越し、②で五分五分、③で負け越し、④で大きく負け越した。朱立倫は、④だけで蔡に対し約13万8000票もの差をつけた。一方、蔡が①で朱につけた差は約4万9000票であった。蔡からすると、④での負け越し幅が大きすぎ他ではカバーし切れなかったということになる。朱からすると、④で蔡陣営の侵入を防いだことが当選につながったと言ってよい。この④の国民党支持の堅固さは、台北市での文山区・大安区の固さと共通する。どちらも、投票行動はほとんど変化していない。流動性の高い②で蔡英文が五分に持ち込んだことは、蔡陣営の中間路線とイメージ選挙の効果であったと見ることができる。

土城市	44.66%	51.26%	44.60%	48.97%
八里郷	38.65%	54.30%	46.26%	48.94%
三峽鎮	42.66%	56.53%	45.45%	48.35%
萬里郷	36.76%	54.69%	40.82%	48.19%
深坑郷	37.94%	48.10%	43.04%	46.58%
林口郷	42.29%	56.35%	45.47%	46.36%
瑞芳鎮	40.42%	52.15%	41.86%	46.30%
石門郷	31.12%	59.55%	40.84%	45.48%
三芝郷	21.53%	61.42%	41.18%	45.37%
淡水鎮	32.47%	54.05%	43.16%	45.17%
汐止市	25.51%	44.12%	40.17%	43.29%
中和市	34.08%	42.00%	36.70%	39.93%
烏來郷	32.35%	52.43%	34.94%	36.10%
永和市	30.57%	36.98%	31.84%	34.41%
新店市	29.83%	35.82%	30.88%	34.27%
全体	40.67%	51.31%	44.30%	47.39%

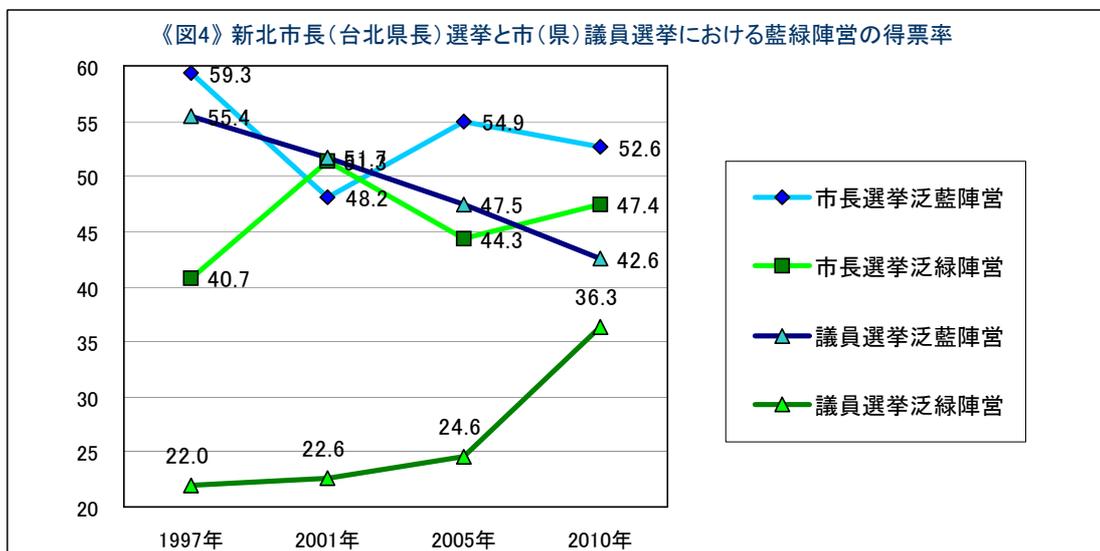
市議会議員選挙での藍緑陣営の得票率はどうなっているであろうか。《表10》で、過去3回の台北県議員選挙と今回の新北市議員選挙での両陣営の得票率を整理した。泛藍陣営の得票率は、1997年の55.4%から2010年の42.6%へと12.8ポイント低下した。一方、泛緑陣営の得票率は、過去3回は足踏み状態であったが、今回は大幅な上昇を見せた。1997年の22.0%から2005年の24.6%を経て、2010年の36.3%へと14.3ポイント上昇した。泛藍は、下降のトレンドが確認できる。泛緑は、今回の上昇幅が突出しているため、上昇傾向にはあるが流動性が大きいという判断に止めておきたい。

《表10》 新北市(台北県)議員選挙における藍緑陣営得票率

	1997年	2001年	2005年	2010年
泛藍陣営	55.4%	51.7%	47.5%	42.6%
泛緑陣営	22.0%	22.6%	24.6%	36.3%
無党籍その他	22.6%	25.7%	27.9%	21.2%

国民党だけを見ると、得票率は前回の38.1%から39.7%へと微増したが、新党と親民党の減少幅をカバーすることはできなかった。これは台北市と同じ構図である。民進党の得票率は、前回の21.4%から34.6%へと13.2ポイントも上昇し、台聯の1.5ポイント減少をカバーして余りあった。民進党は、新北市においても、議員選挙で測られる基礎票が党史上最大となった。議席数では、国民党が前回の28議席から30議席へと横ばいであったのに対し、民進党は16議席から28議席へと躍進した。親民党(前回5)、台聯(前回3)、新党(前回0)のいずれもが議席を獲得できなかった。無党籍その他は、前回の13議席が8議席に減少した。議席総数は、前回の65から1議席増え66である。中選挙区制という選挙制度は変わらないのに小政党が敗北し無党籍候補が減少したことは、新北市において二大政党の対決構造が強まったことを示す。

台北市と同じように、新北市についても市長選挙と議員選挙の両陣営の得票率グラフを重ねてみたい。この《図4》は、台北市の《図3》と比べると、泛緑陣営の市長選挙と議員選挙の2つのグラフの間隔が大きいの。これは、いくつかの要因を指摘できる。①台北県の社会構造の流動性が高いため中間票・浮動票が多く存在する。②台北県では、議員選挙においては二大政党対決構造があまり浸透していなかった。③他県市にも共通することであるが、台北県での民進党の基礎力が弱かった。④台北県は無党籍の地方政治家出身の議員が多くいたので、その票が市長選挙では中間票・浮動票となり、民進党が比較的多く獲得できた。特に蘇貞昌の中間票・浮動票獲得能力は傑出していて、2001年の再選時は、泛緑の基礎票に28.7ポイントも上乗せした。これらの要因が複合し、台北県時代は泛緑の市長選挙と議員選挙の得票率グラフの間隔がひらいていたと考えられる。ところが、今回はその間隔が一挙に縮まった。基礎票に対する蔡英文の上積み幅は、蘇貞昌や羅文嘉と比べてかなり小さい。一方、朱立倫は、泛藍陣営の基礎票が下降トレンドにある中、候補の魅力により中間票・浮動票を上積みしたと言える。



この現象については、筆者の現地調査ができていないので推測にならざるをえないが、蔡英文の中間票・浮動票獲得能力が低かったという仮説を立てるよりも、蔡英文が新北市における民進党の吸引力を高め基礎票を引き上げたという仮説を立てた方がうまく説明できる。今回の民進党市議候補は、元立法委員が出馬したり、話題の多い女性候補が出馬したりで、確かに注目を集めたが、個々の候補のがんばりで党の得票率が大幅に伸びたとは考えにくい。大きな背景としては、馬英九政権への失望、周錫瑋県政への不満などが民進党市議候補の追い風になったと考えられるが、これだけの急上昇を説明するにはやはり不十分である。これは、党主席である蔡英文が市長選挙を戦ったことで民進党への注目が特に増し、地方政治家候補らの弱い票を引き剥がし党公認候補の得票を引き上げたと考えた方が実態に合うのではないか。蔡主席が、小鴨を安全なところに連れていく親鴨の役割を果たしたと考えることが可能であろう。これは、蘇貞昌再選の時ですえ見られなかった現象である。2001年、蘇貞昌は大量の中間票・浮動票を獲得したが、「親鴨効果」は数字の上では確認できない。

(8) 次の選挙の始まり

北二都の市長選挙で、郝龍斌と朱立倫は、経済成長率の上昇や ECFA の締結など馬英九政権の実績を訴えたが、その効果は限定的であった。蘇貞昌と蔡英文は、格差の拡大などで馬英

九政権を批判し一定の手ごたえをつかんだが、訴えの中心は、候補の人柄、統治能力、ローカル・イシューにあり、中台関係は選挙の争点にはならなかった。

郝龍斌は、台湾で最大の政治資源を有する台北市政府を 8 年間率いることが決まった。郝の評価は高くはないが、今後は国民党内で影響力を高める可能性がある。国民党内部では外部とは異なる論理が働くからである。問題となった高架道路改修工事をめぐる疑惑については、市政府の発注担当者ら 3 名が選挙後に起訴された。市政府のネジの締め直しが郝の課題であろう。朱立倫は激戦を制したことで馬英九の後継の地位を固めたという見方があるが、新北市長を 1 期だけで辞めて 2016 年総統選挙に出馬できるかどうかは今後の観察が必要である。行政院副院長よりは動き方が難しいポストに移ったと見るべきであろう。朱は、新北市でとにかく実績を作らなければならない。市議会では民進党が勢力を伸ばしたので、市政運営は決して楽なものにはならないであろう。「三環三線」という捷運建設公約も厳しく監視されるであろう。

2012 年総統選挙は、蘇貞昌または蔡英文が馬英九と戦うことになる。蘇貞昌は五都選挙全体で民進党の上昇機運に貢献をしたが、投票結果は期待はずれであった。しかし、台北市は台湾全体とは支持構造が異なるので、蘇のやり方は台湾全体では通じる可能性は大いにある。蘇は、成功する政治家に必要な吸引力、実行力、安定感があることを示すことができた。課題は既視感の壁であり、それを越えるためには、統治の理論を示すことが必要である。

蔡英文は、選挙プロセスにおいて駆け引きの弱さを露呈したが、従来の民進党指導者とは異なる魅力があり、終盤戦で風を起こした。台湾全体でも、よい戦いをする可能性がある。今後蔡は安定感を示さねばならないが、熟達した政治家というイメージを打ち出せば、普通の人というイメージを失う可能性があるので、バランスのとり方は難しいであろう。馬英九との対戦では、権力保持の駆け引きに巧みな馬英九に分があるように見えるが、蔡英文の人気に一旦火がつけば止めようがなくなる可能性もあり、馬英九としてはやりにくい相手であろう。

国民党は、蘇と蔡を落選させ二人を予備選挙で競わせる状況を作った。これが国民党に有利に作用するかもしれないし、民進党が党の活力と多様性をアピールする結果になるかもしれない。市長選挙は国民党が底力で逃げ切ったが、市議員選挙では泛藍陣営の低下トレンドが観察された。次の立法委員選挙、総統選挙においてどちらの側面が現れるのか興味深い。

(2011.04.15 記)

- 本稿で記されている候補者の年齢は 2010 年 10 月の立候補登録時点のものである。
- 本稿の図表・写真は筆者の作成・撮影である。イラスト画像は「風と樹と空とフリー素材」を使用。
- 五都選挙については拙稿「2010 年台湾五都市長選挙の分析(暫定版)」(<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ogasawara/analysis/fivecitieselection2010c.pdf>)も参照してください。

